



ミドルリーダーの挑戦
—前へ! 前へ!!

教科を超えた授業研究にチャレンジし 学び合える教師集団を築きたい

新潟県糸魚川市立糸魚川東中学校 柳澤 淳 41歳



Middle Leader

やなぎさわ・あつし◎教職歴18年目。新潟市立山の下中学校、上越市立春日中学校などに勤務後、同校に赴任して2年目。37歳から2年間は上越教育大大学院に内地留学。担当教科は社会科。学年主任、研究主任。

これまで私が歩いてきた道のり

授業中、他クラスの 授業ノートを 写す生徒にがく然

新任の頃のことは今でもよく覚えて
います。授業中、生徒は下を向きつ
ばなしで、問い掛けても発言する生
徒は少なく、私が一方的に話すだけ。
同期と夜遅くまで指導案を練って授
業に臨んでいましたが、思うように
進められず、苦しい毎日でした。指
導案が中途半端な時は、授業に行く
のが怖くて仕方ありませんでした。

ある日の机間指導中、生徒が板書
と全く違う内容を熱心に書いている
のに気付きました。よく見てみると、

それは私の新任研修担当の堀秀泉先
生の授業内容で、友だちからノート
を借りて写していたのです。自分の
授業は聞く価値がないのか——情け
ない気持ちでいっぱいでした。

私は先生にお願いして授業を見学
させてもらいました。それは驚きと
発見のある授業で、生徒は楽しそう
な顔で先生の話に聞き入り、キャッ
チボールをするかのように発問と発
言が行き交っていました。そうやっ
て授業が終わる頃には、生徒は学習
内容を納得し、理解していたのです。

一方、私は教科書の内容をどう「伝
える」のかばかりを考え、「どうす
れば伝わる」のかを考えていません

でした。生徒の心に落とし込むこと
が出来ていなかったのです。

理想は生徒と共に 授業を見て真似て ノートを写して流れを学んだ

堀先生のような授業をしたい。私
は何度も授業を見学し、発問のタイ
ミング、発言に対する受け答え、板
書の工夫など、気付いたことを何で
もメモしました。更に、生徒から
ノートを借り、授業を思い返しなが
ら書き写しました。こうして授業を
どう進めればいいのかを学んだので
す。先生によく相談もしました。指
導法に関する本もたくさん読みまし
たが、それよりも先生の授業を見て、
話を聞いた方が何十倍も勉強になり
ました。

先生の真似をしても、すぐに先生
のような授業は出来ませんでした。
でも、理想とする授業が目の前にあ
り、自分なりにどうすればいいのか
を思い描けたことで、苦しくても諦
めることはありませんでした。

新任の研究授業では、私は「生類
憐みの令」を取り上げました。堀先
生に相談をし、導入で同時代の忠臣
蔵の討ち入り場面のビデオを見せて

授業を始めました。「季節は?」「冬」「時間帯は?」「夜」「どうして誰にも気付かれずに吉良邸まで行けたと思う?」——私の発問に生徒から答えが次々に挙がり、その答えに対して別の生徒から疑問が出てきて、話し合いは大いに盛り上がりました。

今、私が踏み出そうとしている新たな一歩

私自身がやりがいを

感じられるよう

自分に来れることをする

2012年度からは、1学年主任と研究主任を務めています。担当の学級や教科以外に、学校全体、学年全体のことを考えるのは初めての経験で、なかなか見通しを持ってず試行錯誤の連続です。ただ、そうした中でも、今までの経験を踏まえながら「もっとこうしてはどうか」と活動を先生方に提案していくことが大切だと思っています。

1学年主任としては、4月の学活で家庭学習の仕方を指導する際に保護者にも参加してもらい、生徒と一緒に学ぶ意味を考え、実際に家庭学

自分の発問で生徒の好奇心を引き出し、考え、発言し、それが周りの生徒の思考につながっていく。その時に感じた生徒とやりとりをしながら進める授業の楽しさが、今も私自身の授業研究のモチベーションになっています。

習をする活動を行いました。

研究主任としては、授業研究を教科横断のグループで行うことを提案。本校の教師は約20人で、担当が1〜2人という教科もあります。小規模校で授業を見合う時間を確保するのは、大規模校以上に調整が大変なのですが、まずはやってみなければ何も変わらないと思い、学年や教科に関係なく5人ずつに分け、1人の授業を他の4人が見て、事後研究会を行うようにしました。私も、他教科の授業について事後研究で話し合うのは初めてで、教材の選び方や生徒との受け答えなど、学ぶことがたくさんありました。一方で、教科が異なっても、指導において大切なことは共通するものだとも実感しま

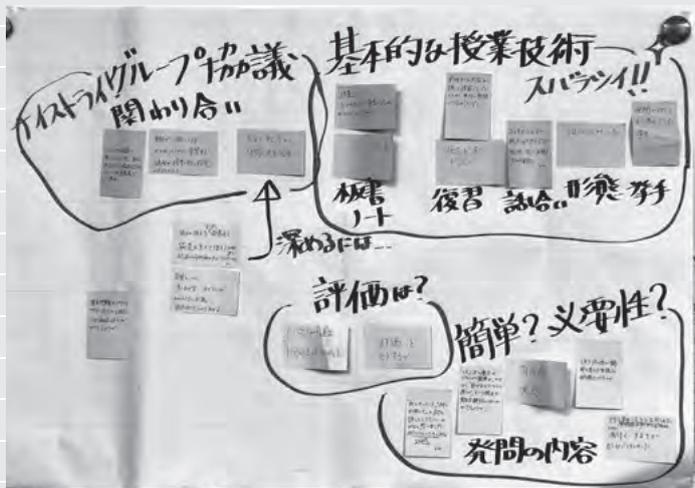
した。他の先生方も同じことを感じただけでしょう。事後研究会では率直な意見が飛び交い、予想以上に議論が盛り上がりました。先生方から「今までにない、密度の濃い研究会が出来てよかった」という声をいただけたのは、大きな収穫でした。かつて私がそうだったように、1人では指導改善に限界があります。自身の経験を伝え、知恵を出し合う

ことで、更に授業がよくなっていく。そして、その過程が教師集団を一枚岩にし、生徒とぶれずに向き合い、育てていく力になると思うのです。先生方を引っ張る立場になったことには戸惑いもあります。それでも、主任1年目を終えた時に何か成果があり、私自身がやりがいを感じていることを目標に、自分に何が出来るかを考え、実践したいと思っています。

教科を超えた授業研究

柳澤先生の取り組み

◎他の先生に相談をし、授業研究を教科横断型グループで行うことにしました。授業を見る観点は、教科の内容ではなく、授業の進め方、教材の選び方、生徒への声掛けなど。指導の技を学び合い、改善できる場とするために、気付いたことを付せんに書き、事後研究会で議論しています。



授業の見学中に、よかったことは青、課題はピンクの付せんに書いておき、事後研究会でKJ法を使ってグループ分けし、他の先生が真似したいこと、課題を浮き彫りにしていった。